

しが国際協力親善大使レポート

なかむら まや
中村 茉耶さん

隊次：2017年度1次隊

職種：助産師

派遣国：セネガル

自己紹介

わたしは、東近江市内の総合病院で助産師として4年間勤務したのちに青年海外協力隊に参加しました。高校生のころから、途上国で働きたいという思いがあり、大学では政治学や国際関係学を学びました。しかし、女性の健康についてもっと専門性を身に着けたいと思い、社会人経験を経て看護学校、助産師学校に進学しました。

活動国、地域の気候や文化の紹介

セネガルは、アフリカ大陸最西端に位置します。現在は乾季であり、まったく雨が降りません。洗濯ものを干すと、1時間ほどで乾いてしまいます。滋賀県は四方を山に囲まれています。セネガルはほとんど平地のため、地平線から上る朝日、地平線に沈む夕日を見ることができます。真っ赤に朝焼けに染まる空と、不思議な枝ぶりの巨木「バオバブ」のシルエットが大好きです。敬虔なイスラム教徒が多い国ですが、女性たちはみなカラフルで華やかなデザインの服を着ていて、とてもお洒落です。

活動や生活について

セネガル・ギンギネオ県に赴任して半年が経ちました。これまで、主に「保健センター」と呼ばれる保健所と診療所を合わせたような施設の中の産婦人科で、診察やお産のお手伝いをしながら、ギンギネオの妊婦さんやあかちゃん、お母さんたちがどのように過ごしているのか、セネガルの助産師はどのような仕事をしているのか、を観察してきました。また、セネガルの公用語であるフランス語と、セネガルで最も多くの人が話す「ウォルフ語」という言葉を学んでいます。ウォルフ語で挨拶をすると、セネガルの人々はとても喜んでくれます。はやく言葉が上達するよう、ご近所さんや職場の仲間たちとたくさんお喋りをしています。

セネガルで活動する隊員はみな、セネガル人の名前を持っており、私は「サフィ・カマラ」といいます。セネガルでの生活の中で一番嬉しかったことは、お産をお手伝いさせてもらったお母さんが、あかちゃんに「サフィ・カマラ」と命名してくれたことです。腰をさすったり、声をかけ励ましていたことについて、「あなたがいたから安心して出産できた」と言ってくれました。見慣れない外国人が近くにいたら、妊婦さんは緊張してしまう

だろうか、と不安でしたが、感謝の言葉をもらい、とてもありがたかったです。日本の助産師や看護師が当たり前のように行っている、「患者さんに寄り添うケア」が、セネガルのお母さんにも喜んでもらえたことも、とても嬉しく思いました。

セネガルには「テランガ」という文化があります。おもてなしを大切にするのです。例えば、セネガル人が昼食を食べているところに出くわすと、必ず「カーイ（こっちおいで）、アニュ（昼ご飯を食べよう）」と誘ってくれます。同僚はもちろんのこと、昼時に病室を覗けば、患者さんが、道を歩けばご近所の人たちが、次々に声をかけてくれます。みんなで一つの大皿を囲み、食後にはのんびりとお茶を飲みます。このお茶は、濃く煮だした緑茶に、たっぷりと砂糖を入れたとても甘いものです。ちびちびと飲みながら、みんなでのんびりとお喋りをします。だからセネガルのお昼休みは、とっても長いのです。

これから、本格的にボランティアとしての活動が始まっていきます。たくさんのセネガル人からいただいたテランガをお返しできるように、あかちゃんとお母さんたちのために頑張っていきたいと思います。



出産に立ち会った「サフィ・カマラ」ちゃんとお母さん、そして私です。

生後1週間で行われる命名式の日、病院に来てくれました。

お母さんも、サフィちゃんもめいいっぱいおめかししています。



語学学校で行った「手洗い指導」の様子です。
このような感じで、小学校での衛生教育を行っていく予定です。



お正月に、ダンスパーティが開かれました。マダムもお姉さんも、
色とりどりのドレスを着て、太鼓のリズムに合わせて夢中で踊っていました。



性教育を行っている高校の生徒と。
私のつたない言葉を、大笑いしながらも一生懸命理解しようと耳を傾けてくれます。



セネガル全土でみられるバオバブの木。その中でも最も大きい木だそうです。
幹の太さは 35m もあり、樹齢は 850 年だとか。
バオバブの実は、甘ずっぱいとてもおいしいジュースになります。